

仏法は内観やで一。

私がこうして現在坊さんとして歩み、今この伝道通信を書いております元々の原点は、27年前の昭和60年、私が大学生のときに親父が癌で倒れた際、先輩の紹介で出会いました一人のお婆さんとの出会いが始まりです。それまで、それほど大きな問題も無くほぼ順風に過ぎて来た我が家におきまして、父の痛ましい闘病生活そして死、それに伴う母の落ち込みようは想像以上でした。そのような逆風のなかで私はそのお婆さんに会ったのですが、何と申しますか、このお婆さんは自分の身にどのような苦難・逆境が来ようと、耐えて進んでいけるような人やな一、という感じを自然に抱いたことであります。いくつか持病を抱えておられ、決して頑健なお体ではありませんでしたが、こころの方は、正に金剛のような非常にたくましい力を有しておられました。

私は、おのずからこのお婆さんの発する人格の光に段々と魅かれるようになり、その後たびたびご自宅を訪れるようになりました。そして、お婆さんがおっしゃるには、「私は仏教聴聞一筋で人生歩んできました。どんなに忙しゅうても、仏法を聞くことを最優先順位で来ました。名倉さん、どうかスケール大きくなってくださいや。仏教は偉大なもんです。命かけるくらいに真剣に聞いていけばわかるようになります。」そのようなことを語られました。

お婆さんは、蜂屋賢喜代(はちや よしきよ)先生という明治・大正・昭和期に伝道に命をかけられた、東本願寺の大阪の末寺のお坊さんに絶対の信を置いて歩んで来られた。そのようなご縁から、私自身が蜂屋先生の書かれた仏教書をむさぼるように読むようになり、またその大阪のお寺にサラリーマン生活しながら通うようになり、ご長男の蜂屋教正先生のご法話を欠かさず聞きに行くようになったのです。それは、ひとえに、私もこのお婆さんのような人間になりたいという思いと、その婆さんを貫いているバックボーンである仏法というものを本当にわかりたいという思いが自然に湧いてきたからであります。

当初は、阿弥陀仏とは、お浄土とは、本願とは、お念仏とは・・・・、仏とも法ともさっぱり理解できなかったのでありますが、「ただ仏法は、聴聞にきわまることなり」という蓮如上人のお言葉を信じて、わからないなりに聴聞を続けてまいりましたのは、やはりお婆さんや蜂屋先生になにか本物の雰囲気、匂いのかいでおったからだと思います。そして、ぽつり、ぽつりと丁度雨のしづくのように、私の身に仏法が少しずつ沁み込んで参ったような具合です。

その後数年してある正月に、お婆さん宅に挨拶に訪ねましたときのことで。私は婆さんにこう申し上げました。「お婆さん、私はこうして仏法に出会わして

もうて、ほんまに幸せもんですわ。・・・」すると、「名倉はん、あんたは仏法を喜んでるんやない。今の境遇がええからそれを喜んでるだけや。勘違いしたらあかん。今のええ境遇が全部崩れても、喜べるもんがあるのなら、それがほんまに仏法を喜んでるゆうことやと思います。」と、ビシッとおっしゃいました。私はその場で頭が上がりませんでした。今に至るまで忘れられない、心に染みとおる大説法でした。

またあるとき、「名倉さん、あんたは外のことはよう見てはるけれど、自分ゆうもんを見ていくのが仏法やで。仏法は内観やで一。名倉さん、あんた自分が豪いと思っはりますやろ。自分に「ええ」というもんがちょっとでも残ったらあきませんのや。名倉さんは善人になろうとしてはるように思う。・・・」

このように、私にほんまのことをポンポンと遠慮なく言ってくれはりました。お婆さんの語録は今に至るまで私の脳裏にたくさん刻まれていまして、危ない私を支えてくれます。歯に衣着せぬお婆さんでありましたが、多くの方に慕われ、愛され、いろんな人生問題の悩みをいつも真摯に聞いておられました。大変かわいい愛嬌のあるお方でしたが、その表情は深く、正に「悪人の自覚」を深く抱いておられたと思います。そして、時折静かなお念仏の声がかすかに聞こえました。まさに、現代の一人の妙好人であったと思います。

私どもの目、耳は外に向かってついておりますから、外の事象、他人の言動はよう見えます。ですから、他人の欠点や悪事、国や企業、団体、社会の欠点、悪事に対しては容易に批評し、批判いたします。それはそれで必要なことではありますが、その方向だけではこの人間社会は冷たいものになり、ぎすぎすしたものになり、決して落ち着いた和のある社会とはなりえませんね。自分を棚に上げて、正義の座に着いて、「ええ」もんになって他を裁いているのでありますから。これに対し、仏の教えは、「自分、自分・・・」と徹頭徹尾、自己をどこまでもエンドレスに問い尋ねて行く道であります。ですから仏道は、厳しい厭な道であります。なぜならば、仏の教えに照らされて自己が段々と見えてくると、結局自分が一番かわいいんだ一、という決して拭い去ることのできない自己中心的な、いやらしい根性の持ち主であることがはっきりと知れてきて、自分で自分をもてあますか、ごまかすしかなく、どうしようもなく無力である自分にぶち当たるしかないからです。

しかし、私は、自分自身がこのどうしようもない雑毒心を抱えた悪人であるという自覚をはっきりと抱くことが、人間として最も健全な道であり、またお互いの人間関係、人間社会をぬくもりのあるものにしていく確かな道であると思います。かつて、聖徳太子いわく、「人皆こころ有り。心おのおの執れること有り。・・・共にこれ凡夫のみ。」と。(十七条憲法 第十条) 合掌
(ご質問、ご感想をどうぞ下さいませ。 mikinakura@nifty.com まで。)